

# 中間報告書

## 第二回（2014年2月6日～5月5日）

国際ロータリー第2690地区  
地区補助金奨学生 永末 藍

## はじめに

前回の報告書同様、まずは私の住むボローニャという街の特徴を紹介します。

1088年、ボローニャにヨーロッパ最古の総合大学であるボローニャ大学が創立されました。このボローニャ大学にはイタリア語の父であるダンテ・アリギエーリや、ガリレオ・ガリレイ、ジョヴァンニ・ボッカッチョなど、名だたる才人が在籍していました。ボローニャ大学で勉強するためにイタリア全土から多くの人が集まり、街の人口は急激に増えたそうです。しかし、この急激な変化はひとつの大きな問題を生むことになりました。増加した人口を賄うだけの住宅が不足していたのです。

この問題を解決するために作られたのが、ポルティコ (portico) です。ポルティコとは、屋根付きの通路のことを指しています。アパートは歩道に沿って建てられているので、その歩道に屋根を作り、その屋根の上に新しい部屋を作ったのです。このポルティコは年々増え続け、今ではボローニャの歩道のほとんどがポルティコになっています。どこの道を通っても同じようなポルティコの景色が広がっているため、初めてボローニャを訪れる人は道に迷いやすいそうです。



左の写真は、カーザ・イズラーニ (casa isolani) という、ボローニャに現存する最古のポルティコです。このように天井の高いポルティコは今では珍しく、下の写真のようなポルティコが一般的です。

このポルティコにはもうひとつ大きな利点があります。ボローニャの歩道のほとんどがポルティコとなっているため、雨の日も傘を持たずに外を歩くことができます。



## 学業面での成果

11月に学校が始まり2月までの3ヶ月間は、イタリア語の発音や楽譜読解などの基礎的な授業が中心でしたが、2月から5月までの3ヶ月は内容がガラリと変わりました。指導者との話し合いの上で一つのオペラと役を決め、オペラ一本すべてを勉強するという授業がはじまりました。私はジョヴァンニ・ペルゴレージ作曲の「奥様女中」の中のセルピーナという役を勉強することになりました。

この「奥様女中」は演奏時間45分程度ととても短い作品ですが、登場人物が三人しかおらず、さらにその内のひとは全くしゃべらないため二人の会話のみとなっています。オペラを勉強するという事は、自分の役の人物像を研究し、発言している内容を理解することはもちろんですが、相手役のことをすべて理解することも必要となってきます。相手が私に質問した場合、どれくらいの間を置いて答えるべきか、一番強調すべき単語はどれか、どのような感情なのかなど、すべてを計算して表現しなければならないということを学びました。先日「奥

様女中」の勉強を終えたのですが、先生の計らいにより今年の10月にこの「奥様女中」を公演することになりました。弦楽四重奏の伴奏と共に歌うそうです。このような機会を得ることができてとても光栄に思います。

また、4月に声楽科とピアノ伴奏者のためのマスタークラスが開かれました。このマスタークラスの指導をしてくださったのは、ミラノ・スカラ座のピアノ伴奏者、そしてスカラ座アカデミーの指導者でもあるヴィンチェンツォ・スカレーラ氏でした。彼は世界三大テノールをはじめとする数多くの偉大なオペラ歌手の伴奏者として世界的にも有名なピアニストです。我々声楽科の学生が用意したオペラアリアの伴奏を初見で伴奏しながら、発声法やオペラの解説、表現法など、様々な点からアドバイスをいただきました。スカレーラ氏のアドバイスに従いテンポや歌い方を少し変えるだけで音楽の印象が180度変わり、とても勉強になりました。

更にオペラの勉強の仕方も教わりました。一般的に歌の練習は一日最長2時間とされています。歌は体が楽器なので、ピアノやヴァイオリンのように長時間練習してしまうと楽器そのものが使えなくなってしまうからです。その2時間を有効に使うためにまずすべきことは、机に向かうことです。はじめから楽譜を譜面台に置いて歌ってみても、それは全く意味のないことです。まずは作曲家について、そしてオペラについて、次にやっと楽譜を開いて歌詞の勉強をし、最後に音をつけて歌うのが最も効果的な勉強法だということを教えてくださいました。楽譜と向き合う時間と良い音楽は比例しているという彼の言葉はとても印象的で、勉強することの大切さを再認識することができました。今月末に再び彼のマスタークラスが開かれるので、吸収できるものは最大限に吸収しようと思います。



ヴィンチェンツォ・スカレーラ氏のマスタークラスの様子（残念ながらピアノを演奏する彼の姿が隠れています）

授業はもちろんですが、コンサートなども音楽を学ぶ学生にとって大変重要な場です。4月29日に、音楽院で初めてコンサートに出演しました。学校の図書館で開かれた小さなコンサートだったのですが、とても貴重な体験になりました。このコンサートは、音楽史を専門とするミオリ教授が毎月開催しているもので、毎回テーマを変えて行われます。今回はG.ヴェルディの作品のみのコンサートで、私はファルスタッフというオペラの中のナンネッタが歌うアリア”Sul fil d’un soffio etesio”を歌いました。最初に1時間程度ミオリ教授がヴェルディの人生や彼の作品などに関する解説をし、その後学生がヴェルディの作品を演奏するという形をとっており、演奏を聴きにきた人も作曲家や曲について理解した上で演奏を聴くことができるので大変興味深い演奏会でした。音楽院の学生はもちろんのこと、クラシック音楽に興味のある外部の方や、当日偶然街中でポスターを見かけたという方もいらっしゃいました。人前で演奏すると良かった点や悪かった点が明確に見えるので、これを参考に更に勉強を進めていきます。5月には4つのコンサートに出演することが決まっているので、更に気を引き締めてそれらのコンサートに挑みます。



図書館コンサートのあと、ミオリ教授（左端）とともに

### ロータリーとの関わり

この三ヶ月はカウンセラーのクラウディオさんが海外出張などで忙しく、残念ながらあまりロータリーの活動に参加することができませんでした。しかし、クラウディオさんが忙しい中時間を割いてくださり、仕事の合間にお茶をしながらお話をし、またクラウディオさんのご家族との交流を持つことができました。

先日、クラウディオさんのお宅に訪問し、ボローニャの伝統的な夕食をごちそうになりました。おいしい料理を楽しみながらイタリアの抱える問題（特に経済問題について）語り合いました。イタリアの人々は意見を交換するのが好きなので、私も何か思うことがあれば意見を主張したのですが、難しい話題だったので思うように発言できなかったのが少し残念でした。日常会話には全く困らない程度のイタリア語は習得していますが、より深くコミュニケーションを取るにはより一層イタリア語の勉強をしなければならないと痛感した一日でした。

クラウディオさん宅を訪問したときに、奥様のマリア・ダニエラさんと長女のコスタンツァさんもいらっしゃいました。コスタンツァさんは幼いころから柔道を習っており、日本の文化にとっても興味を持っています。次回は私が夕食会を開いて和食を振舞うことになりました。遠く離れたイタリアに、日本に興味を持ちその文化に触れている若者がいることは大変喜ばしいことです。日本歌曲コンサートにも関心を持ってきていたので、実現に向けて計画を進めていきます。

### 直面した課題と今後の課題

今私の抱える最も大きな問題は、学習するスピードです。日本で声楽を勉強していたときには、一つの曲に時間を掛けて勉強し、それが形になりつつあると先生が感じればコンサートに出る、という形で進めていくか、数ヶ月後にコンサートに出演するから、それに向けてじっくりと準備をする、という形のどちらかでした。コンサートで演奏する曲は最低3ヶ月前には決まるのが当たり前でした。しかし、イタリアではそうはいきません。一週間後のコンサートに出るよう先生に言われることもありますし、出演するコンサートを2週間後に控えて曲の変更を言い渡さることもあります。これは決して珍しいことではありません。そして人前で演奏するからには完璧な演奏をしなければなりません。準備期間が短いことは決して言い訳にはなりません。

実は前述したミオリ教授主催のコンサートは一週間前に出演が決まり、本番では楽譜を置いて演奏しました。ほとんど暗譜できた状態でしたが、あまりの不安に譜面を立てる決断をしました。先生方は、楽譜を置くことは問題ないとおっしゃってくださったのですが、やはり完全に暗譜した状態で歌うことが好まれます。準備期間が短かったとはいえ、完璧な状態で演奏できなかったことが非常に悔やまれます。

将来は3時間を越えるオペラの公演にも参加することもあるでしょう。そのような舞台に出演するには、より一層素早く楽譜を暗記することが求められます。そして短期間で勉強したものを表に出す度胸も必要です。今回はこの度胸が最も欠けていたと痛感します。

これを克服するには場数を踏まなければなりません。ありがたいことに、今月から数々のコンサートに出演することができるので、ひとつひとつの場を大切に、真剣に取り組みます。

そして、10月にはオペラ歌手の第一歩となる「奥様女中」ではそのコンサートで身につけた力を余すことなく発揮しようと思います。